

People's Republic of Bangladesh

[バングラデシュ人民共和国] 写真・文・吉田亮人

彼の人生、彼の夢



ダッカの街を走る路線バスの車掌として働くリアジ君。客の呼び込み中は、排気ガスや巻き上がる埃を吸い込むことになる。

彼の人生、彼の夢 (2019年7月号掲載)

バングラデシュの首都ダッカで路線バスの車掌として働く少年、ムハンマド・リアジ君。朝4時に起き、6時から仕事が始まる。往復3時間の路線を一日に4~5往復しながら、乗客を呼び込み、乗せ、運賃を徴収していく。仕事が終わるのは22時ごろだ。よりよい生活を求めて地方からダッカに出てきたリアジ君の一家だが、父親の稼ぎだけでは生活が苦しく、リアジ君は学校をやめて働くことにした。そのおかげで妹は学校へ通えている。そんなリアジ君の一日を追い、夢を聞いた。

2019年7月号は
こちらから





22時ごろ、ようやくバスは駐車場に戻る。最後に車内の清掃をして一日の業務が終わる。



夜になっても交通量の多い都心部。リアジ君は交代なしで一日中働き続ける。



昼食は呼び込みの合間に手早く片手で済ませる。



多くの車と人が行き交う路上で、バスの行き先を大声で案内し、一人でも多くの客を呼び込む。



リアジ君は毎朝4時に起床している。バスの駐車場から始発の停留所まで移動するわずかな時間にも車内で横になる。



日本の4割程度の国土に1億6,000万人以上が暮らす、人口密度の高いバングラデシュ。ダッカの街は人いざれに満ちている。

JICAの取り組み
最貧国でありながら年率6パーセントの経済成長を続け、投資先・市場としても注目されるバングラデシュ。JICAは、さらなる経済成長のために必要なインフラ支援や産業の成長、また人々の生活を向上させる保健医療や災害対策などで協力している。

経済格差が激しく、セーフティネットも脆弱な同国で、貧困家庭に生まれた子どもたちは生き残るために働かなければならないのが現実なのである。そんな子どもたちが100万人はいるといわれている。未来のバングラデシュを担う若い力が貧しさの中に閉じ込められ続けるのは、社会全体にとっても大きな損失である。

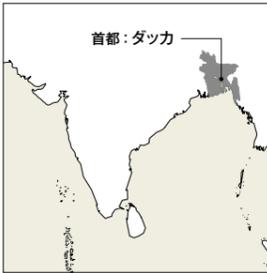
それが当時15歳のムハンマド・リアジ君だった。爪を噛みながら「いいよ」と興味なさそうに答えてくれた彼をその後3年間にわたって追い続けた。
通常ならば学校に通って勉強し、友達と遊んでかけがえのない青春時代を送っているはずだが、それはほど遠い生活を送っていたリアジ君。僅かな賃金を得るために早朝から深夜まで働きに働くのは、言うまでもなく貧しい家族を支えるためだ。

「将来はバス会社のオーナーになって家族を楽させてあげたい」リアジ君の小さな願いに、対して写真でできることは少ないかもしれないが、社会の関心に向けて、問題意識の萌芽を促すことはできるかもしれないと思い、一昨年からは同国である展示プロジェクトを始めた。

少しでも子どもが子どもでいられる時間をつくるために、写真家としてできることを考えていきたい。



乗客から運賃を集めて回るのもリアジ君の仕事だ。彼は誰がどこから乗ったかをすべて記憶している。



首都：ダッカ

バングラデシュ

国名：バングラデシュ人民共和国
通貨：タカ
人口：1億6,555万人
(バングラデシュ統計局、2019年)
公用語：ベンガル語(国語)

吉田亮人 (よしだ・あきひと)

1980年、宮崎県生まれ。小学校教員として6年間勤務後、2010年より写真家として活動を開始。写真集に『THE ABSENCE OF TWO』(2019年、青幻舎)などがある。ウェブサイト <http://www.akihito-yoshida.com>



排気ガスと埃まみれの空気、強烈な太陽光、古びたコンクリートビル群、気が遠くなりそうなどやましいクラクションと車のエンジン音、どこからともなく漂ってくるドブの臭いと目が回りそうなくらい大勢の人間が放つ体臭。そんなものが全部かき混ぜられて巨大なエネルギーを形成しているのがバングラデシュの首都ダッカだ。そこで生きる人々の生の強さに惹かれてこれまで同国を何度訪れ撮影を続けてきた。

被写体は、働く人々。さまざまな労働者の働く現場を写真に収めるため、ダッカ市内のあちこちを訪ね回っていたのだが、その際交通手段としてよく利用していたのが市民の足となっている路線バスだった。

乗車するほどのバスにもドライバーのほかに、切符をもぎったり客を呼び込んだりする車掌が働いている。



写真が貼られたバスの前に立つリアジ君。プロジェクト後、車中で彼を「リアジ」と呼ぶ乗客が出てきた。それまでは「おい、お前」と呼ばれていたのが、名前のある存在となった。



一連の撮影後、リアジ君の写真をバスの車体に貼り付けて走らせる「Return Project」を現地でやった。「写真を現場に還す」ためのプロジェクトだ。